

空の都 立川

立川小唄記念碑建立

エディソン

別冊

立川と語ろう 立川に生きよう
Écoutez Bien Extra Issue No.10



立川小唄と
民踊流し踊り

EW 1229

立川小唄

(一) (川立)

江かき・功、唄
奴 鼓太 八君・九人 線味三

製會神精同皇
撰會授後士將動出京東

THE EDISON RECORD STUDIO, TOKYO

— PR. ASAHI RE —



飛行第五連隊 サルムソン(写真提供:横川裕一氏)

空の都 たちかわ

『立川小唄』が作られる背景——案内人:横川裕一氏

昭和の初期、花街は警視庁・各府県からの指定(大正9年からの指定地制度)により存在を許されていた。飛行第五連隊設置を背景にして、立川もその指定を受けるべく運動し、昭和4年に、当時あった東立川駅(JR南武線)付近に指定地を受けた。翌昭和5年4月の南武鉄道(現・JR南武線)の立川一川崎間全線開通を祝して唄が作られることになり、4月10日に立川キネマにおいて立川二業組合の協力で披露されたのが、『立川小唄』である。披露会には立川町を始め近隣町村有志、八王子、青梅、府中等の関係者500余名が参加、盛大に行われたと新聞記事には報じられている。

この『立川小唄』がつくられた昭和5年頃の立川は、大正11年の飛行五連隊による飛行場開設から約10年めを迎えようとする、町の人口が急激に増えつつあった頃である。

立川の飛行場建設当時の陸軍飛行部隊の主任務は偵察だった。近衛師団に属した飛行第五連隊も創設当時は偵察2個中隊からなる偵察大隊で、そのため当時の写真は乙式一型偵察機(サルムソン2A2)が圧倒的に多い。タイトル写真もその1つである。大正天皇が崩御されその御大葬儀列車が立川駅を通過する際には、飛行第五連隊の将兵460名が見送ったと記録にある。昭和天皇の即位に際しては、国家儀式である御大典を記念した陸軍大観兵式(昭和3年12月2日)があり、陸軍航空部隊は空中分列式を行った。空中部隊の半分以上が立川に集結し、乙式一型偵察機78機をはじめ合計86機が離陸、所沢からの66機と合わせて分列式会場の代々木練兵場上空を埋め尽くした。

立川には、軍だけでなく民間航空も同居し

ていた。洲崎(江東区深川)にあった民間飛行場機能が、大正12年9月1日の関東大震災で使えなくなり、朝日新聞社や日本飛行学校などが立川飛行場の西側に移転、大正14年には御国航空練習所(昭和3年からは御国飛行学校)が開設された。国も昭和4年4月1日に立川飛行場を「東京飛行場」と定め、準国策会社である日本航空輸送株式会社が同日から定期郵便輸送、7月から定期旅客運航を行うようになる。以来、昭和6年8月の羽田飛行場開設による立川からの移転まで、立川上空は軍用機だけでなく民間機、さらには海外からの訪日機もあって、立川は東京の空の玄関、まさに「空の都」だった。

立川飛行場最初の訪日機は、昭和2年9月2日にソ連から飛来。昭和3年にはフランス、アメリカ、ドイツから、『立川小唄』が発表された昭和5年にはイギリス、アメリカ、ドイツ、イタリア、フランスから複数回相次いで飛来している。当時の訪日機すべてが立川飛行場に降りたわけではなく、所沢飛行場にも降りているが、立川には民間機が降りたようだ。その訪日機のクルーには、「和」を意識した記念品を立川町が贈っており、当時砂川町在住だった画家・村田丹陵の富士や桜を題材とした日本画が多かった。(村田丹陵は邨田丹陵とも。明治5年～昭和15年。明治神宮聖徳記念絵画館の壁画「大政奉還図」を揮毫している。東京文化財研究所HPより)

訪日機があれば、立川から欧米へ飛ぶ飛行機もある。大正14年7月22日、飛行第五連隊の3つの格納庫前を黒山の人だかりで埋めたのは、朝日新聞社の訪欧機「初風(はつかぜ)号」と「東風(こちかぜ)号」の出発式。飛行第五連隊の連隊長と全将校、当時立川で編成中であった飛行第七連隊の連隊長以下全将校による送別会、万歳三唱に送られ、兩

機は代々木練兵場に向かって出発。飛行第五連隊の乙式一型偵察機9機が両機に付き添って代々木に向かうともに、町民有志も大挙して代々木に向かっている。

昭和6年、開場前の羽田飛行場から「青年日本号」1機がローマに向けて発つ。機体は立川にあった石川島飛行機製のR3練習機。同社は、昭和3年から立川に工場をおいていた。操縦は立川で飛行訓練をしていた法政大学の航空研究会の学生飛行士・栗村盛孝三等飛行士。付き添え教官には日本飛行学校や御国飛行学校の教官だった熊川良太郎一等飛行士。当時、学生飛行はひとつのブームで、昭和4～5年にかけて法政大学をはじめとして9つの大学・高校が立川飛行場内に研究会を置いていた。加えて、昭和7年7月には学生による訪満飛行が立川から行われてもいる。機体は、「青年日本号」と同じ石川島のR3だった。まだ、学生航空が立川で活動していた時期であった。(参考文献:『立川飛行場戦前史2017年1月版』横川裕一)

●案内人 横川裕一氏

新潟県出身。現在は日野市在住の会社員。小学生の頃から無類の飛行機好き。ネット上自身調べ上げた情報を一部公開している(「航空史の片隅」)。

その一部を見ただけでもマニアの力に圧倒される。2022年の立川飛行場開場100周年を前に、現在『立川飛行場戦前史』をまとめている最中で、今回、立川飛行場の戦前史について多くの情報を提供して頂いた。





3 国土地理院 昭和5年7月発行。飛行場の西南に北から、御国飛行学校、朝日新聞格納庫、日本飛行学校があった。昭和5年当時、飛行場西側に子安農園養豚場がある。◎



3 航空技術部と飛行第五連隊は飛行場を挟んで斜めにさしむかいの位地にあった。当時の飛行場は草原で滑走路はない。◎

『立川小唄』

— 昭和5年発表 —

作詞 大關五郎 作曲 田中豊明 作曲 町田嘉章 振付 花柳徳之輔

- 1 忍び泣くよな春雨晴れて
吹くそよ風、武蔵野に
朝日うらかスポーツ日和
空の都よ、立川よ。
- 2 東京ばかりか浅川青梅
五日市から、一と走り
汽車だ電車だ川崎からも
空の都よ、立川よ。
- 3 飛行五聯隊ありや格納庫
ほんに技術部、さしむかひ
こは日本の飛行機の名所
空の都よ、立川よ。
- 4 鳩か蜻蛉かあのサルムソン
飛ぶはアプロ機、ドルニエ機
シャンがすまてフォッカーに乗った
空の都よ、立川よ。
- 5 可愛い兵隊さんだ明るい朝だ
ほんに強そな、重爆の
ろいんかんどプロペラ廻る
空の都よ、立川よ。
- 6 飛行学校かみくにの人か
なぜかお話し、してみたい
春の日永の日が暮れかる
空の都よ、立川よ。
- 7 月に浮れた夜鴉ぢやなし
赤い電燈が、尾を引いて
夜間飛行のありやサルムソン
空の都よ、立川よ。
- 8 春はよいもの狐の思案
昔戀しい、ふじ塚で
今夜化けよか明日にしか
空の都よ、立川よ。

9 雨よ降るなよ櫻が咲いた
嬉し約束、ほごになる
明日は普濟寺あの花祭り
空の都よ、立川よ。

10 いつか浮名の流れて咲いて
人目忍ぶよ、蛇の目傘
すぎぢやとらなこの左袂
空の都よ、立川よ。

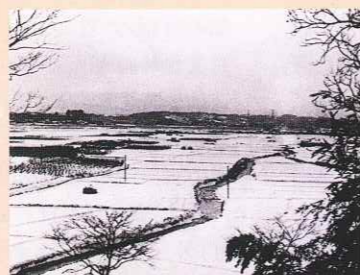
11 朧月夜のチラ〜灯
芝地通れば、なつかしや
戀の花咲くキネマが見える
空の都よ、立川よ。

12 五月節句の仲町通り
若い憲兵さんの、うしろかげ
誰が見てみたなつかしがつた
空の都よ、立川よ。

13 心氣くさけりや貝がら坂へ
行こか太古の、貝掘りに
さつき花咲く日曜ぢやないか
空の都よ、立川よ。



9 普濟寺の桜は当時も今も美しい



17 昭和15年頃の中澤の様子。多摩川から引かれ富士見町団地を抜け、根川に注ぐ川のこと。月のきれいな晩には、川が帯のように光っていたのだろう。☆



2 中央線鉄橋を走る電車 昭和6年頃 ☆

14 波れ日野橋御茶屋が見える
浮いて静かな、屋形船
眺めなつかし秩父や御嶽
空の都よ、立川よ。

15 わたしや夏帯さらりとした
今夜嬉しい、螢籠
さげて行きましょ立川田圃
空の都よ、立川よ。

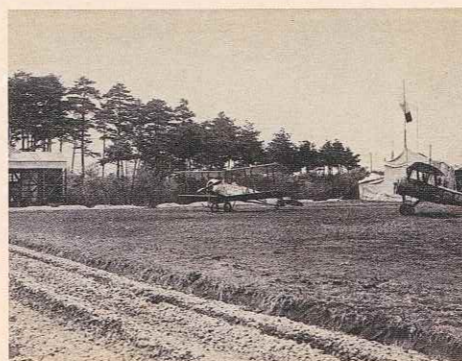
16 揺れる蘆間によしきり鳴いて
眺めはるかな、富士の山
けふは根川で鮎釣りましょか
空の都よ、立川よ。



20 立川亭の屋形船 明治30年頃、鶺鴒の様子 ☆



24 お祭りて諏訪神社、八幡神社に奉納される立川の伝統芸能 獅子舞 写真は棒使いの舞



4 中央の機体がアプロ練習機 日本飛行学校で ◎



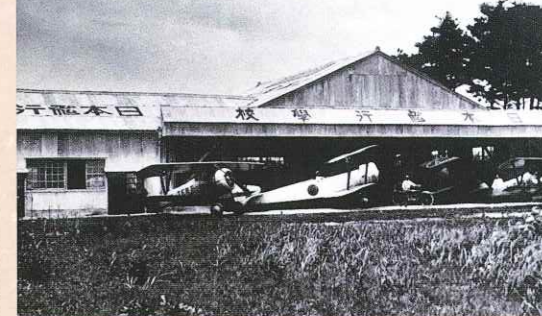
4 ドルニエ・コメット旅客機 朝日新聞J-BAMA ◎



4 サルムソン(乙式一型偵察機) ◎



4 フォッカー スーパー・ユニバーサル旅客機 ◎



6 日本飛行学校。この北側に朝日新聞を挟んで御国(みくに)飛行学校があった。☆



5 ドルニエ ドン(八七式重爆撃機) ◎

17 誰が忘れたきれいな帯を
しかも田圃の、まん中に
なんの中澤月夜の川だ
空の都よ、立川よ。

20 船頭裸だ鮎漁の客だ
いまは鶺鴒の、屋形船
浴衣がけだよおしやれな女子
空の都よ、立川よ。

18 神興もみ〜若衆が渡りや
ふけて静かな、夏祭り
可愛いあの子の縁むすび橋
空の都よ、立川よ。

21 二十日宵闇河原の花は
河原なでしこ、月見草
離れ々々の中洲にひらく
空の都よ、立川よ。

19 水の流れる玉川砂利よ
鮎のどぶ釣り、あんま釣り
釣れりや瀬釣りのさて面白や
空の都よ、立川よ。

22 香りなつかしメロンの出来る
農事試験場だ、雌鷄が
女心の初戀をする
空の都よ、立川よ。

23 子安農園養豚場の
豚は種豚、おしやれ豚
夜間飛行じや吃驚するな
空の都よ、立川よ。

24 日本晴れだよ法螺貝が鳴る
うちの太郎は、棒使ひ
笛だ太鼓だ獅子舞が来る
空の都よ、立川よ。

25 見ろよ舞込み雌獅子と雄獅子
「松にからまる、葛の葉も」
歌はよいもの獅子舞歌は
空の都よ、立川よ。

26 五十六十ぢやまだ年や若い
太鼓叩いて、秋祭り
可愛がられるあの諏訪さまに
空の都よ、立川よ。

27 雪の大山丹澤秩父
晴れりや輝やく、冬の富士
こは普濟寺咲く寒椿
空の都よ、立川よ。

はやし言葉(歌詞の最後に繰り返し)
わたしや飛行機風まかせ
お前のでやうで雷返り
オヤクルリトセー ションガイナ

※歌詞については昭和5年4月10日発行の『民謡 立川小唄』に準じています。



『民謡 立川小唄』

☆ 写真提供：立川市歴史民俗資料館
◎ 資料提供：横川裕一氏(写真は全て立川での撮影)



16 昭和16年4月 根川堤より日野橋を見る ☆



25 現在も夏の諏訪神社例大祭には、獅子舞が奉納されている。写真は天狗と三匹獅子。「松にからまる葛の葉も」は獅子舞の歌詞。



26 現在の諏訪神社。



23 子安農園養豚場の絵葉書から ◎



27 100年前から同様に、今も大山、丹沢、秩父、雪の富士山を眺めることができる。

あのころの立川

— 昭和5年頃から戦前まで —

☆ 写真提供：立川市歴史民俗資料館
◎ 資料提供：横川裕一氏

① 飛行第五連隊正門

大正11年11月に岐阜県各務原から移駐してきた陸軍第五飛行大隊は、大正10年12月に編成された航空第五大隊を前身とする飛行戦隊のひとつで近衛師団に属し、大正14年には飛行第五連隊と改称した。写真の場所は、まさに今「立川小唄」碑が建立される場所。西側に現在はモノレールが走り、飛行第五連隊の格納庫はみどり地区となっている。



飛行第五連隊開隊記念日の様子(昭和初期) ☆



2008年撮影。現在はIKEAがあり、手前の立飛みどり地区にはヤギが放牧されている。2018年2月複合施設の着工予定。

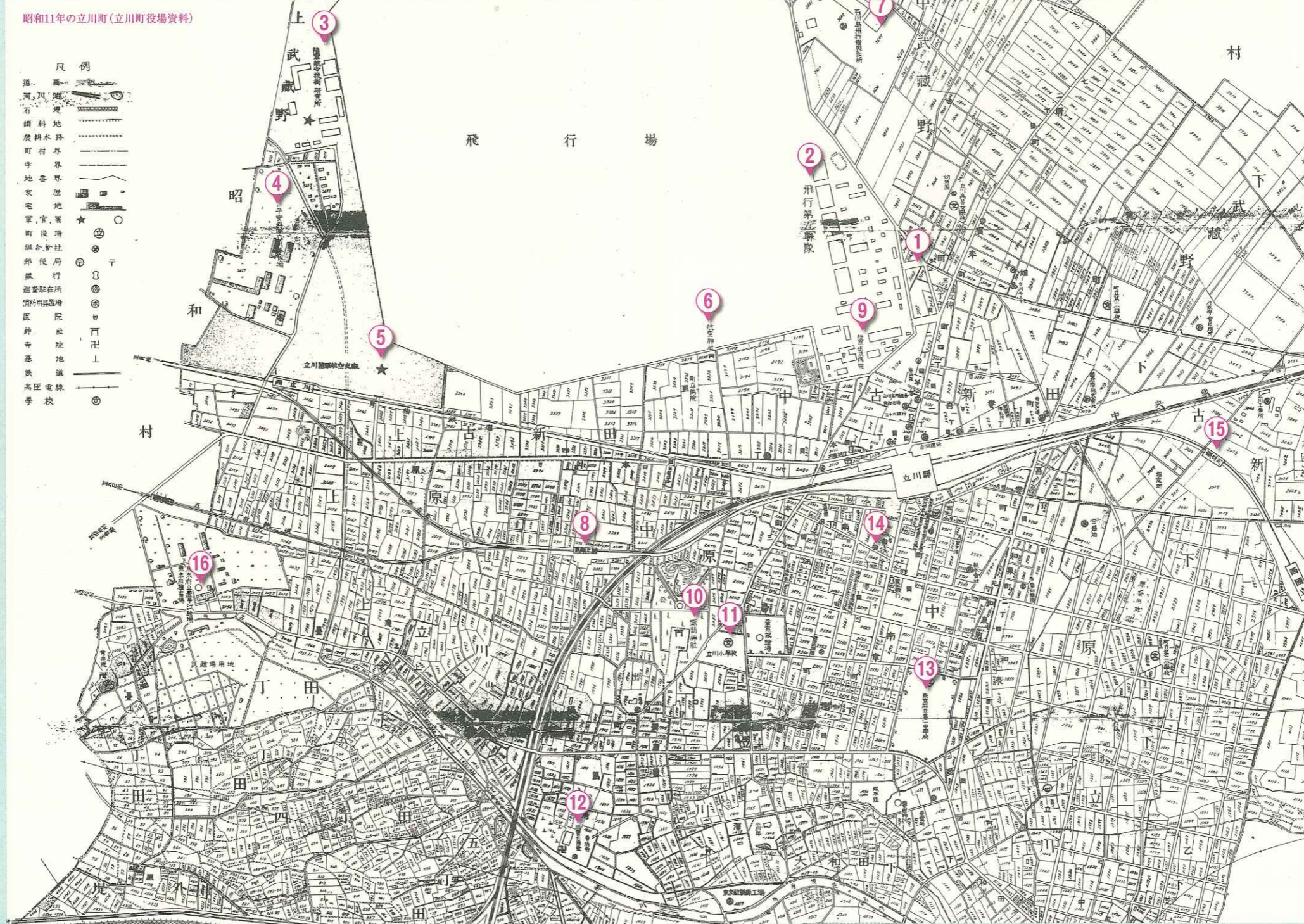
④ 子安農園養豚場



昭和9年6月27日東日府下版陸軍補給部の拡張で養豚場の移転が余儀なくされたという記事。「豚神像」も移転と書かれてある。◎



「豚神像」と呼ばれていたのは、池田勇八作の「聖豚像」か。現在は真如苑復建接心道場の応接室に安置されている。(写真協力：真如苑)



昭和11年の立川町(立川町役場資料)

- 凡例
- 河川
 - 池
 - 石
 - 園地
 - 農耕地
 - 村界
 - 宇界
 - 地界
 - 家地
 - 官署
 - 官舎
 - 町役場
 - 組合
 - 社
 - 郵便局
 - 銀行
 - 巡査
 - 警察
 - 神社
 - 寺院
 - 墓地
 - 鉄道
 - 高圧電線
 - 学校

② 飛行第五連隊

③ 航空本部技術部

⑤ 立川陸軍航空支廠

⑩ 諏訪神社

⑪ 立川小学校

⑬ 東京府立第二中学校

⑭ 立照閣(真如苑)

⑯ 東京府立農事試験場

⑮ 東立川駅

27番までの「立川小唄」だが公募でその先、28番の歌詞に唄われる「東立川」。立川駅と西国立駅の間であり、恋の街と言われていた。

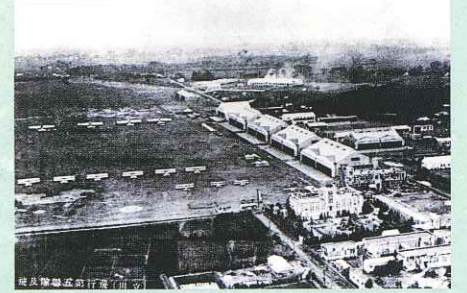
⑫ 普濟寺



「立川小唄」制作記念写真。普濟寺にて。後ろに立つ5人は左から中島舜司氏、並木吉蔵氏、鈴木貞治氏、大関五郎氏、原田重久氏(昭和3年頃) ☆

⑨ 陸軍衛戍病院

(後の国立立川病院、現・災害医療センター) ◎



⑧ 武蔵上原(むさしうえのはら)駅

現在は踏切があるのみだが、かつて駅があったのだと思わせる風情がある。



現在の様子

⑦ 石川島飛行機製作所

(昭和11年立川飛行機株式会社と改称)

現在も立飛ホールディングスの敷地内には、戦前の建物が多く残っている。



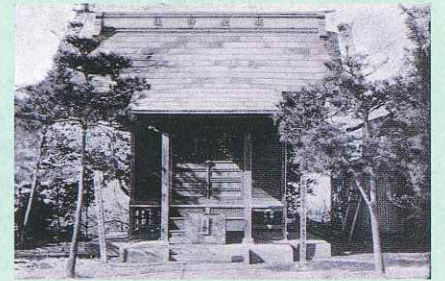
当時の飛行機製作の様子 ☆

⑥ 航空神社

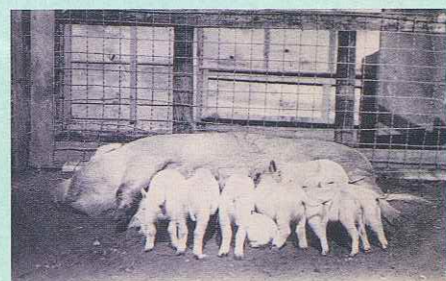
大正15年12月、飛行第五連隊の福田第一中隊長機と小川中尉機が空中で接触、砂川三番に墜落、部隊初の殉職者を出した。翌月、昭和2年1月軍の中から兩名の慰霊碑建設の計画がなされたが至らず、立川町本町組青年会が神社建設に奔走、飛行場南側に航空神社を設置した。遷宮式は昭和4年4月20日。それまでの立川飛行場関係犠牲者11名が合祀された。その後5月の例大祭ごとに犠牲者が合祀され、戦後は太陽神社とされていたが、現在その姿は見られない。



昭和8年の例大祭 ☆



航空神社 ◎



ヨークシャー母子 ◎



牝豚運動場水浴池 ◎

「空の都」こぼれ話

新井写真館

現在高松町にある新井写真館(現館主・新井布敏氏は3代目)。初代・新井清雄(ワーキングネームは新井康弘)氏は戦前陸軍の航空写真師だった。写真師としての信用を得るためにお店を出した方がよいという軍部のアドバイスで、大正15年、吾妻町(現在の曙町、フロム中部の裏手)に写真館を開店。高い技術を持った写真師として、日本全国、朝鮮半島にまで出向き、記録を残している。当時、所沢の喜多川、立川の新井、霞ヶ浦の広岡、浜松のアケミと称された飛行場付写真師。戦後、乾板や資料になるようなものは捨てるよう軍部の指示があったようで、新井さんのお宅に残っているのは数枚の航空写真だった。それでもそこには初代の別格の技術が表れている。航空写真には1枚1枚、操縦士の名前と偵察隊員の名前が記入されていた。新井写真館、すごい歴史をお持ちだった!



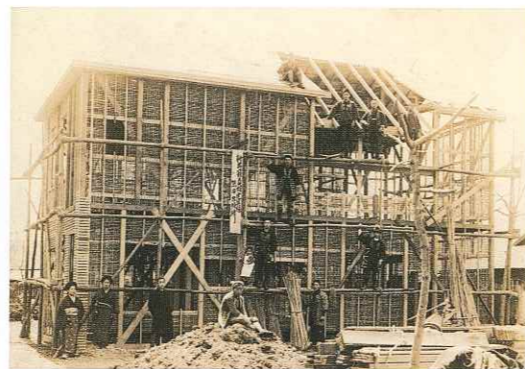
「新井写真館」完成写真。現在のフロム中武裏手。



新井清雄氏



榎田門あたりの航空写真



吾妻町に新築中の「新井写真館」



吾妻町、お祭りの様子。ご自身あるいはご先祖さまが写っている方がいらしたら、ご連絡ください!

立川が飛行場に選ばれた理由

陸軍航空第五大隊敷地選定委員会が陸軍大臣に報告した選定地「東京府北多摩郡立川村字原市場西北部」、これが立川飛行場となっていく場所だった。候補地に挙がっていたのは4か所で、①川越町南方、②東京府小川付近、③神奈川県上溝付近、④東京府立川付近。調書によれば、立川は「多少の起伏ありかつ森林を含有するを以て飛行場として設備のためには比較的経費を要するも、地域広大にして要すれば将来の拡張に当り周囲に制限を受ることなく実行し得ると、職員以下居住のためには中央線を利用し東京郊外ならびに八王子より通勤容易なると東京市との交通のため鉄道道路ともに欠点なきを持って、将来同隊の維持費を考ふる時は比較的良好的候補地とす(『立川飛行場戦前史』より抜粋)」とされている。

南武鉄道 全線開通祝賀会

昭和5年4月19日、西国立駅前の広場で行われ、「立川小唄」が披露された。この祝賀会では、朝日新聞社のドルニエ・メールクル(酒井飛行士操縦)に、神奈川県知事や川崎市長、立川町長などが乗り込み、会場上空から南武線に沿って飛行、川崎市や鶴見上空で祝賀ビラを散布した。加えてサルムソン機(熊野飛行士操縦)は会场上空で妙技を披露、祝賀ビラを散布したと記録にある。翌4月20日は航空神社の遷宮式で、陸軍飛行第五連隊の創立10周年記念祝賀会も開催された。翌日の21日には日本航空輸送の定期郵便下り便の初日、27日には航空本部技術部の開庁式と、祝賀ムード満ち溢れる1週間だったと想像される。

立飛ホールディングスに残る戦前の建物

米軍による立川への空襲は8回。うち6回、砂川町と立川飛行機が標的とされた。しかし、立川飛行機敷地周辺に爆弾が落ちて、立川飛行機内に空爆の被害はひとつもなかったという。終戦後、立川飛行機の各建物は進駐軍が利用し、おかげで今も戦前の建物が残っている。戦前そして基地時代の立川の面影が残る建物をご紹介します。

新立川航空機株式会社 旧本社

大正13年創業の石川島飛行機製作所は、昭和5年立川に移転、昭和9年に「九五式一型練習機(赤トンボ)」を製作。昭和11年、立川飛行機株式会社に商号変更。終戦により事業閉鎖、GHQが接収。当時の立飛在籍総人員は42332人。戦後、立飛企業株式会社と新立川航空株式会社の2社に分かれて不動産部門とものづくり部門に。平成24年より現在の株式会社立飛ホールディングスになった。



旧本社に残されていた石川島飛行機製作所時代の本。



2階ホール



廊下



階段



トイレの扉



立飛敷地内



窓のないこうした小さな建物は、トイレなどとして使われていたらしい



波型の屋根が工場を表している。かつて立飛敷地内にはあらゆる工程の工場があり、敷地内で飛行機がすべて製造できるようになっていた。



門柱は戦前のまま

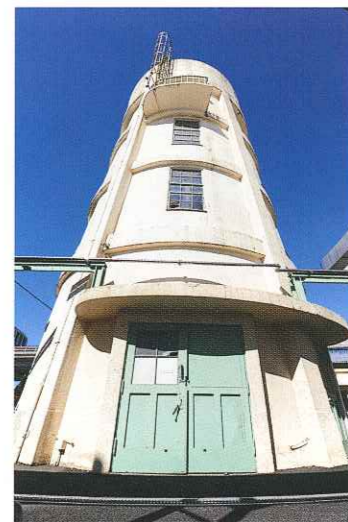


格納庫だった建物。



給水塔

モノレール高松駅の東側にある特徴的な建物



『立川小唄』記念碑発起人のみなさん



前列左から 小林正治さん、村野安成さん、中野隆右さん、
豊泉喜一さん、布施明さん、

後列左から 栗原一さん、藤堂教文さん、木内和郎さん、
清原輝雄さん、井上昇一さん(たましん)

かたこと

立川市教育委員長を13年間も務められた故・五十嵐栄治さんが、米寿にちなんで88万円を10の文化団体に寄付したそうです。その団体のひとつに立川教育振興会(中野隆右理事長)がありました。この寄付金を基に、各種団体や個人からの寄付を合わせ、記念碑建立に至りました。五十嵐さんの後押しがあったのか、飛行機にまつわる大きな力があったのか、えくてびあんが特集号を作ると決めると、面識のない方から1通のメール。それが横川裕一氏で、長年かけて調べた記録や写真を惜しげもなく提供して下さいました。『立川飛行場戦前史』ができるのが楽しみです。この度も立川市歴史民俗資料館にはたくさんさんの写真をお借りしました。ありがとうございました。

えくてびあんスタッフ一同

表紙の人

「立川小唄」のレコードとジャケットに、平成26年8月23日にすずらん通りで復活披露された踊りを合わせてみた。踊っているのは八王子の芸者衆。右端に座っているのは、立川にひとり健在の元芸者さん、「立川小唄」の振付を知っていた栄子お姉さん。平成29年5月14日、たましん本店北側広場に記念碑が建立される。

えくてびあん ©

別冊えくてびあん 空の都 立川 立川小唄記念碑建立

平成29年4月25日発行

発行 有限会社 えくてびあん

〒190-0023

東京都立川市柴崎町2-1-10 高島ビル4F

TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065

発行人 黒須 環

企画・編集 えくてびあん編集スタッフ

デザイン ㈱デックC.C

印刷 三浦印刷株式会社

無断転載を禁じます。